

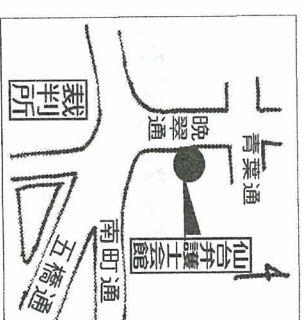
—— 日本軍「慰安婦」被害者・李容洙(イムソ)さん証言集会 ——

# 私のたどつた道 いま伝えたいこと

## ご案内

戦争中、日本軍が行く先々で設営した「慰安所」。そこで行われた恥づべき所業の数々。拉致した被害者・日本軍「慰安婦」たちの人権を踏みこじり、誇りを奪い、人生を台無しにしたことを、日本政府は未だ謝罪していません。私たちはこの問題の早期解決をめざしています。

被害者の一人である李容洙さんは高齢になった今も、女性たちの人権回復を求めて活動しています。韓国在住の被害者本人から直接お話しを聞けるのは、宮城では今回初めてです。今後実現は困難と思われるので貴重な機会になります。



とき 7月18日(休日) 13:00~15:30  
ところ 仙台弁護士会館  
参加費 ¥1000

主催 日本軍「慰安婦」問題の早期解決をめざす宮城の会  
連絡先 仙台市青葉区一番町 4-1-3 市民活動サポートセンター144 (090-2023-9076/090-7799-4296)  
李容洙さんをお招きする会  
連絡先(090-9428-9001)

## 李容洙(イ・ヨンス)さんの紹介

- \*1928年、植民地朝鮮で生まれる。
- \*1943年、14歳の時に強制連行されて汽車で慶州、平壤を経て大連まで移送される。そこから船で上海の「日本軍慰安所」へと送られ、翌44年春ごろに台湾の「慰安所」に移管され、解放（1945年8月）を台湾で迎える。翌46年、18歳の時に帰国し、連行以来3年余りで故郷に戻る。
- \*1992年6月25日、日本軍「慰安婦」被害者だと名乗り出る。その後、今日まで、日本各地で証言活動を行い、日本人とも積極的に交流してきた。

## ブックレット『李容洙さんの証言』(1996年)からの抜粋

「軍人は私を見て、同じように髪の毛を引っ張って、刀で着物を全部切り裂いて、裂いたその着物を、まとめて口の中にくわえさせて、暴力を加えました。」

「電気拷問を何度受けたかは、私は記憶にないんです。ただ最初のときは、ほんとに体が震えて、『オンマー』って呼んだことだけが、記憶に残っていて、それ以降、私は気を失ってしまったと思います。」

「私は日本の若い人たち、ほんとにかわいそうです。こんな重い歴史をね、若い人たちに任せたら、若い人たちはどうしますか。私はね、この政府が、悪い奴らが、私たち一人一人死ぬように待っています。」

「どうして殴りますか、どうしてたたきますか、小さな女の子どもを… …とにかく、日本の国家が謝罪し、私の名誉を回復しないといけないです。」

「私はとっても悔しくて、今年(1996年)の3月から慶北大という有名な大学に入りました。大学でね、国際法律、歴史、そして日本語を勉強しています。この歳でね、こんなに悔しくて、今更ね、病気の体で一週間に三回でかけます。」

## 3・11 大震災犠牲者の冥福を祈るハルモニたち

大震災直後の3月16日、962回目を迎えたソウルの日本大使館前で「慰安婦問題解決のための定期水曜集会」は多くの報道陣に囲まれながら、大震災犠牲者の冥福を祈る黙祷が始まった。日本軍「慰安婦」として連行されて生涯消えない傷を負った被害者ハルモニたちが、加害国・日本の人々を哀悼するのは阪神大震災に次いで二度目のことだった。ハルモニたちは「過去に犯した過ちを認めない日本のために苦痛極まりない歳月を生きてきたが、大勢の人が地震で亡くなっていくのは本当に悲しい」と口々に語った。集会に参加していた李容洙さんもテレビに映しだされ、「隣の国のことなので、本当に心が痛みます。日本の皆さん、力を落とさないでください。がんばって、がんばって」と、大震災の被害者に声を限りに呼びかける姿は人々の共感を呼んだ。